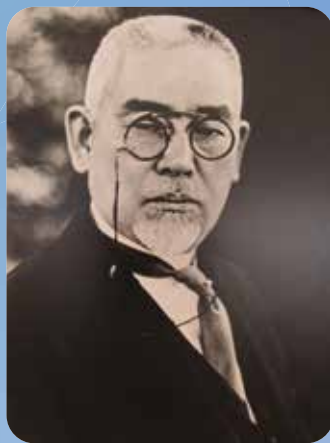


第77回 軽井沢夏期大学

受講
無料



軽井沢夏期大学は、大正7年に「学俗接近」を唱えた新渡戸稲造先生と後藤新平先生により創設された通俗大学です。戦前戦後の一時中断後、昭和24年に再開され、本年で再開以来77回目を迎えます。

この機会に、伝統に裏打ちされた質の高い講座をお気軽にお楽しみください。

令和7年8月6日(水)、7日(木)、8日(金) 軽井沢町中央公民館 大講堂

※軽井沢夏期大学は **申込不要** でご参加いただけます。

※各講座の日程等については裏面をご覧ください。

※会場では湯茶のご用意はありません。マイボトル(水筒等)をお持ちください。

会場案内図



＜録画配信について＞ **申込必須**

開催後、申込者限定で軽井沢町公式YouTubeにて講義の録画配信を予定しています。

＜配信期間＞

令和7年8月25日(月)から9月24日(水)まで

＜申込方法＞

いずれかの方法で申込をしてください。

1. ながの電子申請サービスによる申込
右記二次元コードから申込ください。

2. メールまたはFAXによる申込

下記事項を記載のうえ事務局宛に申込ください。

件名: 軽井沢夏期大学録画配信申込

①氏名 ②メールアドレス ③電話番号

④居住地等(町内、県内、県外、佐久教育会)の別

＜申込期間＞

8月12日(火)から9月1日(月)まで



軽井沢夏期大学と
同時開催!

英会話ゼミナール (**申込必須** ・先着順)

【日 時】 8月6日(水)、7日(木)、8日(金) 13時から15時30分まで(全日)
※3日間連続した内容となります。1日のみ等の参加はお受けできません。

【ク ラ ス】 ①初心・初級 ②中・上級の2クラス(各クラス 先着10名)

【申 込】 いずれかの方法により、7月23日(水)までに申込ください。

1. ながの電子申請サービスによる申込

右記二次元コードから申込ください。

2. メールまたはFAXによる申込

下記事項を記載のうえ、事務局宛に申込ください。

件名: 英会話ゼミナール申込

①氏名 ②ご希望のクラス ③メールアドレス ④電話番号



【問い合わせ】 長野県北佐久郡軽井沢町大字長倉2353番地1
軽井沢町教育委員会生涯学習課内 軽井沢夏期大学事務局
TEL 0267-45-8695 FAX 0267-46-1152 E-mail shakai@town.karuizawa.nagano.jp

海と日本

日 時		講 師・演 題	講 演 内 容
8月6日(水)	9：10	開講式	
	9：30 ～ 11：50	名古屋大学名誉教授 林 上 先生 ゲートウェイ（Gateway） の地理学	ゲートウェイは、相対的に長い距離を移動するモノや人が集まり出て行く玄関口のようなものです。モノは原料・素材・製品などであり、貿易・卸売などに携わる人々や企業が集荷・発送の役目を担ってきました。人の場合は、現代人の国内外の旅行やビジネス移動のほか、移民・奴隷貿易・軍隊派遣などの歴史も含まれます。時代や地域によって異なりますが、多くは都市に設けられた玄関口のようなところに集まったり集められたりし、船舶、鉄道、航空機などがそれを運ぶ役割を果たしてきました。なかには城下町の本戸や宿場の出入口のように、遠方への送り迎えの場であったところもあります。ゲートウェイの対の概念はセンター（中心地）です。これは卸売と小売の関係に似ています。港・空港・駅などで積み下ろされた卸売品は、最後は小売品に分けられ近隣の消費者に販売されます。地球上にセンター（市場やショッピングセンターなど）の役割を果たす地点が数多くあるように、ゲートウェイ（港や駅など）機能を担う地点もまた多数存在します。ゲートウェイの地理学は、ゲートウェイという概念を手がかりに都市や地域について考える地理学です。
8月7日(木)	13：00 ～ 15：30	大阪商業大学教授 松尾 俊彦 先生 日本の内航海運 ～日本経済を支える 海の道の現状と課題～	前半では「内航海運の概況」として、まず現在の内航海運の事業規模、貨物の輸送量、輸送品目、さらに他の輸送機関との分担率などについて説明します。事業規模は小さいものの、日本の基幹産業を支える重要な役割を果たしていることを紹介します。次に、戦後に残された多くの小型機帆船をどのように大型鋼船に置き換えていったかという近代化政策と、それによって形成された内航海運の独自の構造について触れます。また、海外海運産業から日本の内航海運を守るための保護政策や、過剰な船舶を避けるための業界内の調整事業についても解説し、現在の内航海運の姿を明らかにします。 後半では、「内航海運が抱える課題」として、まず船員問題を取り上げます。特に近年、船員の高齢化と不足が大きな問題となっており、その根本的な原因は何人の船員を乗せなければならぬかという「定員」にあることを解説します。次に、働き方改革に対する内航海運業界の対応について、トラックドライバーの問題（いわゆる2024年問題）と比較しながら説明します。最後に、人口減少に伴う課題として、自動化船の導入や外国人船員の活用、さらに内航海運の環境問題への対応について紹介します。
	9：30 ～ 11：50	九州大学教授 磯辺 篤彦 先生 海洋プラスチック汚染の 現状と今後 ～海洋観測による監視と シミュレーション予測～	日常生活から川を経て海に至るプラスチックごみは、世界の海に漂流あるいは海岸漂着する海洋プラスチックごみの8割を占めます。そして、漂着と漂流を繰り返すうち、劣化が進み、次第にマイクロプラスチックといわれる微細片に破碎されていきます。これらマイクロプラスチックは、プランクトンなど微生物から大型の海洋生物に容易に誤食されるため、海洋生態系への影響が懸念されています。 この講演では、世界の海洋に漂うマイクロプラスチック浮遊量を記録した、日本が世界に提供するデータベースであるAtlas of Ocean Microplastics (AOMI[青海]データベース)などをもとに、海洋プラスチック汚染の現状を紹介します。また、コンピュータ・シミュレーションによって得た今後の浮遊量予測や、私たちに求められるプラスチックごみの削減数値目標について、最新の研究成果を紹介します。
8月8日(金)	13：00 ～ 15：30	自然環境研究センター 上席研究員 森 英章 先生 噴火する絶海の孤島・ 西之島の保全 ～島の生態系をゼロから 100年先まで追いかける～	2013年、40年ぶりに噴火した西之島。溶岩の流出や火山灰の堆積を繰り返して面積を10倍以上に拡大しながら元の島を全て飲み込みました。ゲームのリセットボタンが押されたように、西之島の生態系はスタート地点に戻ります。周囲を海に囲まれ、他の大地から遠く離れた場所に新しい島が誕生したとき、どのような順で生物たちは定着し、どのように複雑な生物間のバランスを築いていくのでしょうか。世界中でここだけでしか見られない、海洋島生態系の始まりの瞬間を見逃すわけにはいきません。 生物や地質の専門家らにより組織された総合学術調査隊により明らかにしてきた最新の調査成果と、その価値の保全に向けた検討について、火山活動中の遠隔無人島で確実に調査を遂行するための技術開発の経過を交えながらご紹介します。
	9：30 ～ 11：50	中央大学教授 海部 健三 先生 ウナギ：海と川をつなぐ魚 ～生態・文化・消費と保全～	ウナギは海で生まれて川で育つ降河回遊魚です。ダイナミックな回遊を行うその生態は、長年人間の好奇心を魅了してきました。ウナギは世界の至る所で、時には食料として、時には薬品として、あるいは信仰の対象として、人間と強く関わっています。例えば、オーストラリアにある世界最古の養殖場の遺構では、ウナギの養殖が行われていたことが確認されています。日本でもウナギは大きな社会的関心を呼んでおり、その人間との関わりは、海と川を行き来するウナギの生態と密接に関係しています。さらに近年、ニホンウナギを含む多くのウナギ属魚類が減少し、絶滅危惧種や準絶滅危惧種に区分される種が増加しています。ウナギの回遊生態は、保全と持続的利用の難しさに直結していますが、同時に解決策もまた、海と川をつなぐその回遊生態に隠されているはずです。軽井沢夏期大学では、まずウナギの生態について理解を深め、ウナギと人間の関わりや、消費と保全の現状を概観しながら、ウナギと人間の未来について話し合いたいと考えています。
8月8日(金)	13：00 ～ 15：30	國學院大學教授 神長 英輔 先生 海の外地「北洋」の誕生 ～北洋漁業の歴史と そのナラティブ～	「北洋」とは「日本列島の北方、特にロシア・ソ連極東の沿岸ないし周辺海域で、日本人が漁業をおこなっていた海域」です。「北洋」は日本北方の境界領域（フロンティア）であり、日本の外部でありながら日本人が活躍する（すべきである）海域として語られてきました。 「北洋」は「北洋漁業がおこなわれた漁場」であるため、その地域・海域は時期によって異なります。戦前の北洋漁業の中心はカムチャツカ半島や沿海州（現在のロシア連邦沿海地方）などのソ連極東の沿岸漁業（区分された海岸の漁区に漁場・加工場・缶詰工場などがあった）でしたが、戦後は千島列島・カムチャツカ半島・アリューシャン列島沖合の公海漁業が北洋漁業と呼ばれました。 北洋漁業の最盛期は日露・日ソがたびたび戦火を交えた20世紀の前半です。そのため、戦前の北洋漁業のナラティブ（物語）では宿命の対決として日ソ・日露関係が語られ、戦争のレトリックが多く使われました。こうしたナラティブの構造やレトリックは戦後の北洋漁業や領土問題のナラティブでも使われるようになりました。公海漁業としての北洋漁業はすでに終わりましたが、北洋漁業が生んだナラティブの構造はいまだに日露関係、特に領土問題を語る上で日本社会に大きな影響力を及ぼしています。